
記念日

長谷部まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記念日

【Nコード】

N2243A

【作者名】

長谷部まこと

【あらすじ】

子供の無邪気な思いから生まれた、悲しく恐ろしい記念日です。朗読用に作った文章なので、読みにくい点などあるかと思いますが、ご了承ください。

信二

信二

今日は5度目の結婚記念日だ。

かなり大きめのバラの花束をかかえて家路を急いでいる。

僕は毎年、記念日という記念日（まあ、それは加代が勝手に決めたにすぎないのだが）を、

覚えていたためしかなかった。何が記念なのかよくわからず、覚えていないというよりもむしろ、何も考えていないというのが正しかった。

加代は記念日ごとに手ぶらで、時には泥酔して帰ってくる僕を見て、

ひどく悲しそうな顔をするのだった。

声には出さないが、

「今年も忘れちゃったんだね」

という目をするのだ。それを見るたび、来年こそは・・・と思うのだが、

結局のところ忘れてしまふのだった。

そんな僕が今、「奇跡」と呼ぶにふさわしい深紅のバラでいっぱいの花束を持ち、

いざ帰らんとする家には、加代のほかに二人の子供がいる。

今年で10歳になる双子の女の子である。

お気づきのことだろうが、二人は僕たちの間に生まれた子供ではなく、

僕と双子とは戸籍上でのつながりしかない。

つまり、加代の連れ子なのである。

加代の前夫であり、双子の父親である男は、双子が4歳の時に亡

くなったらしい。

泥酔して階段を上りきったところでバランスを崩し、転げ落ち、頭を打って亡くなったそうだ。なんともまぬけな話だと思ったとたん興味も失せ、

その後延々と続いたおしゃべりおばさんの話はほとんど忘れてしまった。

家が見えてきた。柄にもなくドキドキしていた。

加代はどんな顔で出迎えてくれるだろうか。

玄関の前に立ち、ネクタイをきちんと締めなおした。

そして、ふう、と深呼吸をしてドアを開けた。

「ただいま」

声が少しうわずった。

返事はない。

夕飯の買出しにでも出かけたのだろうか。

「ただいま」

もう一度、今度は探るような声で言ってみたが、やはり返事はない。

「ただいま」ともう一度言いかけたところで、視線と足が止まった。僕を出迎えた加代は、大きく目を見開いて、折れているのだろうか、首をエクソシストのように反転させ、操り人形の糸が切れたように階段の前に倒れていた。

ことね

ことね

なんだが外が騒がしい。

こないだは裏のおうちに消防車が来だし、お隣のお隣には救急車が来だし、

ウーウー、カンカン、サイレンの音は聞き飽きていた。

サイレンはだんだん近づいてくる。音が大きくなってくる。

ウーウーウーウー聞こえてくる。

一番大きく聞こえたところで、サイレンの音はピタリと止んだ。

そっとお部屋のドアを開けると、階段を挟んで向かい合う、あやねちゃんのお部屋のドアも開いた。わたしはニッコリ微笑んでお部屋のドアを閉めた。

こうするとあやねちゃんは絶対私のお部屋にきてくれるのだ。

トトトンとリズムカルなノックの後、ゆっくりとドアを開け、

探るようにしてからあやねちゃんは私の部屋に入ってきた。

信ちゃん、ちゃんと買ってきたかしら、ママにプレゼント。

今日は大丈夫だよ。

今朝、ボケーツとご飯を食べている信ちゃんに近づき、

私は信ちゃんの右の耳に、

「今日は何の日？」

と囁いた。信ちゃんはあやねちゃんと私の顔を交互に見ては、キョトンとしていたから少し心配だった。

外の騒がしい声が大きくなっている。

あやねちゃんと私は、大きな窓から外を見た。

外にはお隣のおばちゃんやら、見知らぬ金髪のお兄ちゃんやら、

ぐちゃぐちゃいた。

二人で外を眺めていると、お部屋のドアが少し乱暴に開いた。ちゃんとノックしてっいつも言ってるでしよう？と振り返ると、そこには知らないおじちゃんが立っていた。

あやね

あやね

くまみたいに大きい知らないおじちゃんは、私たちに近づいてきて、

本物の熊みたいに大きな手で私たちの頭をなでながら、

「一緒においで」と言った。

私とことねちゃんは、いつものように手をつないで、

くまのおじちゃんにくっついてトントんと階段を下りた。

くまのおじちゃんは、最後の階段で急に止まったから、

私とことねちゃんは、くまのおじちゃんの背中に頭をぶつけた。

くまのおじちゃんは、熊みたいにおっきいから、

前は何にも見えなかった。

わたしはくまのおじちゃんの左後ろから前を一生懸命のぞいて、

信ちゃんを探した。

信ちゃんは真っ赤なバラの花束を右手にもったまま、

朝ごはんを食べていたときよりも、

もっとボケーンとした顔で玄関に突っ立っていた。

プレゼントだ！

おんなじようにくまのおじちゃんの右後ろから覗き込んでいたことねちゃんと、

くまのおじちゃんに隠れて、信ちゃんに見えないように握手をした。

信ちゃんはもちろんとママにプレゼントを買ってきたんだね。
よかったね。

わたしたちは握手をしたまま、
くまのおじちゃんに聞こえないようにお話した。

わたしたちはくまのおじちゃんを後ろから突っついた。
信ちゃんのそばに行きたかった。

くまのおじちゃんは、

「ごめん、ごめん」と言っでどいてくれた。

ひらけた視界の下の方には、

マネキンのようにぐちゃぐちゃになったママが倒れていた。

赤い花びら

信二

僕を呼ぶ声がある。まるでスピーカーのようだ。

両側から細い腕がするりと絡まってきた。

右手に握り締めていた花束がドサリと音を立てて床に落ちた。

真っ赤な花びらが一枚、脱げかけた加代のスリッパにハラリとくつついた。

ハッとわれに返って辺りを見回すと、スーツを着た知らない男が目の前に立っている。

警視庁とか書かれた引越し屋のようなつなぎを着た男が数人、テレビで見るようにあちらこちらで探し物をしていた。

開け放された玄関の向こうでは、たくさんのやじうまがこちらを覗いていた。

スーツの男は「残念なことです」といい、

僕の悲鳴を聞いた隣のおばさんが通報したこと、

加代は階段から落ちて頭を打って亡くなったのだろつということの説明した。

スーツの男はしゃがみこみ、視線を双子に合わせてなにやら言っている。

双子はこくりとうなずくと、力を入れて両腕に巻きついてきた。

僕たち3人は白い布をかぶせられて運ばれていく加代と、

撤収していく警察の姿を眺め、辺りにいつもの静けさが戻るまで、動くこともなく立ち尽くしていた。

ことね

わたしとあやねちゃんは信ちゃんを見上げた。

放心状態の信ちゃんを元氣付けてやらねばならないと思った私たちは、

「今日はお花買ってきたんだね」とか、

「バラが大好きなこと知ってたの？」

などと話しかけた。

信ちゃんは怖いくらいつめたい目で、私たちの手を振りほどいて、何も言わずにお部屋に行ってしまった。

ママが倒れていた、昔はパパが倒れていた場所に取り残された私たちは、

手をつないで階段を上り、左右に分かれて自分たちの部屋へ戻った。

どうして？

あやね

朝早くチャイムが鳴った。

信ちゃんは今朝目覚まし時計にも気づかないくらいだから、玄関に行かなくちゃと思った。

小さな声で「今行きます」と言いながらお部屋のドアを開けると、ことねちゃんのお部屋のドアも開いた。

いつものように手をつないで階段を下りようとしたら、

驚いたことに信ちゃんが玄関に立っていた。

そしてお客さんは、くまのおじちゃんだった。

私たちは急いで信ちゃんのところへ行き、いつものように腕を組んだ。

私たちを交互に見た信ちゃんは、階段の下で倒れていたママと同じような目をしていた。

信二

朝早くやってきた刑事は、

加代は何者かによつて殺されたのかもしれないと言い出した。

加代は階段から落ちて頭を打って死んだのだ。

加代は事故死でいい。大きな声でそう言いたかった。

これ以上悲しい思いはしたくない。このまま放っておいてほしい。

怒りにも似た悲しみが込み上げてきて、刑事につかみかかろうとした時、

両側から小さな手が絡みついてきた。

両側から僕を覗き込む2人の目がキラキラと輝いていた。

加代が一度だけ、

「夫を亡くした私に元気をくれたのは、あの子達の笑顔だ」と話したことがあった。たしかにそのとおりかもしれない。二人の顔をみたたん、ふっと力が抜けた。

僕は落着いて「帰ってください」と刑事に言い、双子を強く抱きしめた。

ことね

くまのおじちゃんと話し終わると信ちゃんは、何も言わずにお部屋に行ってしまった。

信ちゃんは昨日から全然遊んでくれないし、お話もしてくれない。ママがいなくなったら、私たちとだけ遊んでくれると思っていたのに。

あやね

信ちゃんもママとおなじだった。

パパがいなくなったら、ママは私たちともっとたくさん遊んでくれると思っていた。

でもママは、しょんぼりとして私たちとは遊んでなんかくれなかった。

ことね

私たちはママが大好きだったから、ママを横取りするパパが嫌いだった。

だから私たちは、パパとママが寝る前に飲むお薬を、パパが飲んでいたお酒に混ぜた。

ママもすっかり眠ってしまったころ、

パパは酔っ払ってタコみたいにふにゃふにゃしながら階段を上って

きた。

それぞれのお部屋からパパが階段をあがってくるのを見ていた私たちは、

階段の上でパパを待って、

「おやすみ」

と言ってわたしたちの頭をなでたパパを突き落とした。

パパはびっくりした顔のまま、声も出さずに階段を転げ落ちていった。

私たちはパパの顔がおもしろくて、

クスリと笑ってそれぞれのお部屋に帰っていった。

あやね

パパがいなくなつてしばらくして、

悲しい顔をして全然遊んでくれなかったママが、

信ちゃんを連れてきた。

信ちゃんは、パパやママとちがつてたくさん遊んでくれたし、

楽しいお話もたくさん聞かせてくれた。

わたしたちは信ちゃんが大好きになった。

わたしたちは、信ちゃんを横取りするママが嫌いになった。

ママがいなければ、信ちゃんはわたしたちとだけ遊んでくれるだろうと思った。

結婚記念日の日、ママは眠れなかったらしく、

信ちゃんが会社に行った後、少し眠そうな顔でテレビを見ていた。

私たちは、眠れない時にママが飲むお薬をジュースに溶かして飲ませてあげた。

そして、お部屋に戻って寝ようと階段を上がってきたママを突き落とした。

ママは、パパとおんなじようおな顔をして、

パパみたいにくちゃくちゃになりながら落ちていった。
わたしたちはクスリと笑って学校へ行った。

ことね

信ちゃんは今会社から帰ってきて遊んでくれなかった。

あやね

今日だってまだぜんぜん遊んでくれない。

ことね

わたしたちは信ちゃんのお部屋に行った。

あやね

どうして遊んでくれないの？

ことね

せっかくママがいなくなったのに。

あやね

パパがいなくなった時のママとおんなじ。

ことね・あやね

どうして遊んでくれないの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2243a/>

記念日

2010年12月13日21時17分発行